

J A 自己改革推進レポート（J A 鳥取中央） 3月号

1. 琴浦ブロッコリー生産部が2年連続で販売金額4億円を突破！

琴浦ブロッコリー生産部は2年連続で目標金額4億円を突破し、過去最高の出荷量20万506箱（1箱6kg）を記録した。

令和2年産は、春・初夏ブロッコリーが年明け以降の暖冬でロスもなく計画以上の出荷が続き、1月から7月末の上半期の出荷量は前年を7%上回る12万1,162箱（同）と上半期で過去最高を記録した。年末には降雪被害があったが、生産者の栽培努力により、年間を通しての販売金額は4億1,300万円と大台の4億円突破につながった。



2月3日に琴浦町で開いた総会では、生産拡大に尽力した奨励賞として福本さん、優秀賞として手嶋さん、語堂さん、財賀靖洋さん、藤吉さん、小前さん、Earth grace（株）、財賀敏昭さん、金屋ブロッコリー組合、松田さんに表彰状を贈呈した。

また、時期別、適正品種の検討による品質の向上、補助事業の活用などによる面積拡大を図り、継続出荷により市場から信頼される産地を築いていくことを全体で確認した。令和3年産は新規就農者などで6人増え、80人の農家が前年を32ha上回る180haで栽培し、24万箱（同）、5億400万円の出荷、販売の目標に向かって取り組んでいく。

同部会の寺岡部会長は「マスコットキャラクターのロコトやSNSなども活用し販売面も強化していくとともに、今年もおいしいブロッコリーを消費者に届けていき、目標の5億円を目指していく」と意気込みを話した。

2. 畜産部門でRPA導入！ 農家訪問の時間確保

J A 鳥取中央は、NTTグループが開発したロボティック・プロセス・オートメーション（RPA）システム「WinActor」を令和2年2月に導入し、事業効率化を進める事で、畜産部門の事務作業を年間約20時間短縮した。

畜産は同J Aの販売高の約2割を占めており、定型業務の自動化に必要なシナリオは同J Aが独自に作成した。作業の最適化、正確性の向上で単純作業を減らし、生産現場への訪問などに充てる時間を確保することで組合員サービスの向上につなげている。

畜産課の職員は「自動化で確認作業に時間をかけることができ、ミスも減った」と話す。シナリオ作成を担当した企画リスク管理課は「光学式読み取り装置（OCR）も併用できれば、さらに20時間を短縮できる」と一層の効率化に意欲を見せている。

3. コロナ状況下こそ「居場所」を！

休止検討も運営継続・愛情込め安全提供する子ども食堂「ほっとここ」

J A鳥取中央は、旬の農畜産物や直売所で使用できる農畜産物引換券の贈呈など、継続的に子ども食堂への食材支援に取り組んでいる。

平成28年にオープンして今年で5年目を迎える倉吉市子ども食堂「ほっとここ」は、子どもから高齢者までが食事や学習を通じて交流できるコミュニティスペースを目指している。安価でおいしい料理を提供して幅広い年代が利用できるように11時30分から20時まで運営しており、会社帰りの大人からも好評である。

新型コロナウイルスの影響で一時は活動休止も考えたが、利用者から要望も多く、滞在時間の制限、消毒や検温などの徹底、持ち帰り用の弁当を提供することで運営を続けている。

コロナ状況下で弁当の持ち帰りを利用する人も増え、「ほっとここ」代表の田中さんは「自宅でもお弁当を食べながら家族団らんのきっかけにしてほしい」と思いを込め、また、「この場所を頼りにしている人は多い。コロナ対策を取りながら運営を続けている。食事を通して自然と交流できる場をつくり、未来ある子ども一人ひとりを大事に地域で育てたい」と笑顔で話す。

同JAは、地域貢献、さらに食農教育の意味も込め地元産中心の食材にこだわり、具だくさんの季節感あるメニューを作って運営してもらうため、引き続き子ども食堂への支援に取り組んでいく。



以上